幼児の問題行動と自己表現力の関係

○國田祥子

(中国学園大学子ども学部)

キーワード: アサーション, 問題行動, 幼児

Relationship of infant's problem behavior and assertion

Shoko KUNITA

(Chugoku Gakuen Univ.)

Key Words: assertion, problem behavior, infant

今日、保育現場において気になる子と呼ばれる子どもたちの存在が注目されている。多くの場合、気になる子には他者や物に対する暴力的行為や仲間集団の輪に入っていけないなどの問題行動が見られ、保育者はそうした子どもたちへの支援を模索している。

佐々木(2008)によると、問題行動を示す子どもには身体 の健康と心の安定感、自律できる力、自己統制力、自己肯定感、自己表現力、自己解決力、他者と交わる力、社会規範の内面化といった力が弱いとされる。この内、問題行動と自己表現力の関係について調べた研究に半田(2007)がある。

半田(2007)は思春期の子どもたちを対象に調査を行い、アサーションが上手くできない子どもに問題行動が多く見られると報告している。アサーションとは「自分の意見・考え・気持ち・相手への希望などを、なるべく率直に正直に、しかも適切な方法で表現すること」(平木, 1993)と定義されており、その能力は自己表現力を示すものと考えられる。

問題行動とアサーション能力の関係について、幼児を対象とした調査は見あたらない。そこで本研究では、幼児の問題行動とアサーションの関係調べ、気になる子の背後にある要因を探索することを目的とする。問題行動が多く見られる子どもほど、アサーティブ得点が低くなると予測される。

方法

調査対象 岡山県内の保育園および幼稚園で3・4・5歳児クラスの担任をしている保育者125名。

質問項目 幼児用問題行動尺度(保育者評定版)(金山・中台・磯部・岡村・佐藤・佐藤, 2006)と児童用アサーション尺度(半田, 2007)を幼児用に一部改変したものを用いた。さらにフェイス項目として子どもの年齢(月齢)と性別を尋ねた。

手続き 保育園および幼稚園に質問紙を郵送し、9名の保育者(3・4・5歳児クラス担任各3名)には担任クラス内の気になる子ではない全ての幼児について回答し、返送してもらうよう依頼した。他の116名の保育者には、担任クラス内の1人の気になる子について回答し、返送してもらうよう依頼した。これは、幼児の特性についてある程度の幅を持たせるための操作であった。

結果

返送された248部のうち記入漏れのあった44部を除いた204部(男児130名、女児74名分)を分析の対象とした。

金山ら(2006)に基づき外在化問題行動得点と内在化問題行動得点を、半田(2007)に基づきアサーティブ得点を年齢・男女別に算出した(図1)。クラス×性別の2要因分散分析を行ったところ、外在化問題行動得点、内在化問題行動得点ではクラスと性別の主効果が有意だった($F(2, 198)=7.85, p<.005$, $F(1, 198)=15.79, p<.001$, $F(2, 198)=9.60, p<.001$, $F(1, 198)=9.22, p<.005$)。多重比較の結果、年齢が上がるにつれ問題行動が減少することが示された。また、女児よりも男児において得点が高くなっていた。アサーティブ得点ではクラスの主効果のみが有意となった($F(2, 198)=3.70, p<.05$)。多重比較の結果、

図1. クラス別(性別)平均得点
※エラーバーは標準誤差を示す。

3歳児クラスと4歳児クラスの間でのみ有意差が見られた。

次に、外在化問題行動得点、内在化問題行動得点およびアサーティブ得点間の相関係数を算出したところ、全ての得点間で有意な正の相関が得られた(表1)。

表1. 得点間の相関係数

	1	2
1. アサーティブ得点		
2. 外在化問題行動得点	.350 ***	
3. 内在化問題行動得点	.400 ***	.289 ***

*** $p<.001$

考察

問題行動が多く見られるほどアサーティブ得点が低くなるという予測とは、異なる結果となった。このことは、幼児期においてアサーション能力の低さが問題行動の多さにつながらないことを示している。幼児期における問題行動は、自己表現が上手くできないことによる葛藤に起因するものではないのかもしれない。一方で問題行動が多く見られる子どもほどアサーション得点が高くなったことから、幼児期の問題行動とされる行動の中には、適切な自己表現として捉えるべきものも含まれている可能性が示唆されたと考えられることもできるだろう。また、4歳児クラスにおいてアサーティブ得点が低くなった原因は不明であるが、心の理論の獲得のような何らかの心的発達に関与している可能性も考えられる。

引用文献

- 金山元春・中台佐喜子・磯部美良・岡村寿代・佐藤正二・佐藤容子(2006). 幼児の問題行動の個人差を測定するための保育者評定尺度の開発 パーソナリティ研究, 14, 235-237.
- 半田将之(2007). 児童用アサーション尺度作成の試み創価大学大学院紀要, 29, 239-255.
- 平木典子(1993). アサーション・トレーニング さわやかな自己表現のために 日本・精神技術研究所
- 佐々木光郎(2008). 心豊かな子どもの育成を求めて—思春期問題からの学び— 平成20年度秋田市教職員研修会「教育講演会」講演資料